

伝統技術産業の連関構造の社会的・文化的要素
—京都伏見日本酒クラスターの事例—

藤本昌代
河口充勇

The Socio-Cultural Factors in the Linkage of Traditional Manufacturers:
A Case Study of the Japanese Sake Cluster in Kyoto Fushimi Area

Masayo Fujimoto
Mitsuo Kawaguchi

ITEC Working Paper Series

07-13

June 2007

伝統技術産業の連関構造の社会的・文化的要素
ー京都伏見日本酒クラスターの事例ー

同志社大学 技術・企業・国際競争力研究センター
ワーキングペーパー07-13

藤本昌代

同志社大学 社会学部 准教授
602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
TEL: 075-251-3452
FAX: 075-251-3066
mfujimot@mail.doshisha.ac.jp

河口充勇

同志社大学 技術・企業・国際競争力研究センター(ITEC)
COE 特別研究員
602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
TEL: 075-251-3183
FAX: 075-251-3139
mkawaguc@mail.doshisha.ac.jp

キーワード：日本酒クラスター、京都伏見、動的持続性、連関構造

本文内容の専門領域：産業クラスター研究

著者の専門領域：産業社会学（藤本）、社会人類学（河口）

要旨：

本稿は、2005年より藤本と河口が実施している「京都伏見日本酒クラスター研究」プロジェクトの成果報告である。本研究の調査対象地域である京都伏見は、古くから日本酒造りを中心とした産業集積地である。伝統産業として数百年の歴史を誇る老舗も多いこの地域は、多くの産業と連関しながら発展してきた。この連関は同じ産業の組み合わせで継続してきたのではなく、時代とともに技術革新や社会的な要素に対応しながら変化している。本研究の目的は国際競争力やクラスター内の新陳代謝に関心が集中する中、企業の継承性を含む「持続力」をもった日本酒クラスターの連関構造とその変化を社会的側面、地域的側面、文化的側面、技術的側面から分析することにある。京都という複合的クラスター（いくつものクラスターが重層的に存在し、アクターも複数のクラスターの要素として存在する）に隣接する伏見地域の特性を踏まえて分析を行う。本稿では、2005～06年度に得られた質的、量的データのうち、質的調査、資料を概観し、本研究における産業クラスター分析のアプローチについて示した。

謝辞：

本研究は、文部科学省 21 世紀 COE プログラム「技術・企業・国際競争力の総合研究」プロジェクトにおける研究成果である。調査の過程において、伏見酒造業界、および関連業者、地域の方々に多大な協力を得た。記して感謝の意を述べる。

伝統技術産業の連関構造の社会的・文化的要素 —京都伏見日本酒クラスターの事例—

藤本昌代/ 河口充勇

1. はじめに

本研究の調査対象地域である京都伏見は、古くから日本酒造りを中心とした産業集積地である。伝統産業として数百年の歴史を誇る老舗も多いこの地域は、多くの産業と連関しながら発展してきた。この連関は同じ産業の組み合わせのみで継続してきたのではなく、時代とともに技術革新や社会的な要素に対応しながら変化している。この地域では酒造業を中心として、多くの業者（酒蔵専門の建設業者、酒造機器専門の職工業者、容器製造業者・リサイクル業者、ラベル業者、流通業者、杜氏など出稼ぎ労働者を主な顧客とする宿泊業者・貸布団業者、米糠・酒粕買取業者、酒造の副産物を活用する食品加工業者、伏見酒を扱う小売店・飲食店、原料米を供給する周辺の農家など）が関わり合いながら長年に渡って酒造業を支えてきた。われわれの研究の目的は、この「持続力」をもった伏見日本酒産業クラスターの連関構造とその変化を社会的側面、地域的側面、文化的側面、技術的側面から分析することにある。本稿は 2005 年度、2006 年度に行われた伏見酒造業調査によって得られた質的、量的データのうち、質的調査、資料を概観し、本研究における産業クラスター分析のアプローチについて示す。

2. 産業クラスターへの期待と盲点

2. 1 日本に輸入されたクラスター概念

日本では 2000 年頃から、Michael . E. Porter が示した「クラスター (cluster)」という概念が多く用いられている。クラスターとはブドウの房を指し、集団を扱う時や類型化などの分析単位に用いられる。Porter はクラスターを「特定分野における関連企業、専門性の高い供給業者、サービス提供者、関連業界に属する企業、関連機関（大学、企画団体、業界団体など）が地理的に集中し、競争しつつ、同時に協力している状態を言う」と説明した (Porter 1998=2005:67)。これらはアメリカの西海岸にあるシリコンバレーと呼ばれる比較的狭い地域を典型的事例として取り上げ、IT 技術を中心とした技術力の高い企業、大学、公

的機関、ベンチャーキャピタリスト等々が地理的近接性を活かしたコミュニケーションを行い、それぞれが補完的役割を果たし、相乗効果によって発展し、継続するという状態を示したものである (Porter 1998=2005)。これまで業種ごとに分類されてきた産業論に対して、ある分野で相互に関連する多様な業種、アクターの存在に注目するこの議論は新しい視点として着目された。世界中で第 2 のシリコンバレーを生みだそうと公的機関が動き出し、日本でも経済産業省の産業クラスター政策、文部科学省の知的クラスター政策と政府が産業政策に注力した。また経済産業省の(独)経済産業研究所、文部科学省の科学技術政策研究所、研究・技術計画学会地域科学技術政策分科会の東京地区会合の共催で、地域クラスターセミナー¹⁾が開かれ、各国の在京大使や科学技術政策担当者を招き、各地域政策について講演がなされている。産業クラスター政策²⁾も第 2 期が 2006 年度から始まり、継続的に取り組まれている。

2. 2 国際競争力とクラスター概念

Porter の関心は、先端的な技術力による経済的な優位性という競争力にあり、「クラスター」の存在がそれらにどのように影響しているかを見ている。Lee Chong-Moon らによるシリコンバレーを対象としたクラスター研究は、以下の 10 個を特徴として挙げた。1) ゲームの有利な規則 2) 知識集約 3) 良質で流動性の高い労働力 4) 結果志向型実力社会 5) リスクテイクに報い、失敗を大目に見る風土 6) 開放的なビジネス環境 7) 産業と相互に交流する大学と研究機関 8) ビジネス、政府と非営利的組織間の協力 9) 高い生活の質 10) 専門的なビジネスインフラ (Lee et al. 2000=2001)。シリコンバレーでは新しいビジネスを始める上での地域的近接性、多様な機関の補完的關係など、新規的で萌芽的な起業のインキュベーションとなる土壌が揃っている。日本のクラスター政策でも先端的な技術のクラスターへの関心が高い。しかし眼前に広がるのは、成功例より、かつての産業技術地域政策で注力されるも、資金がとぎれたとたんに勢いを失う「にわかクラスター」であるように思われる。

2. 3 継続性とクラスター概念

クラスターの特性でわれわれが注目したいのは、Porter や Lee とも言及している「継続性」である。Lee らが言うように、「シリコンバレーもどき」は出来ては消えるということを繰り返し、継続的な「クラスター」に成長する地域は多くないようである (Lee et al. 2000=2001)。確かにスタンフォード大学の学生たちによって始められた創業約 70 年というシリコンバレーの有名企業の事例は、アメリカという国の歴史を辿れば、大変長いといえるだろう。これは起業する 1,000 社のうち 3 つしか生き残れないと言われるベンチャー企業の成功事

例として伝説的である。日本全体の中でも創業年から 100 年を超える企業はそれほど多くない。しかし、京都には 1,200 年の歴史の中、100 年はおろか数百年の歴史を誇る企業が数え切れないほど存在している。これらの企業は、いくつかの伝統産業群となって狭い京都の近接性の中で補完的な関係を保っており、ハイテク系ではないものも多いが、複数の企業が重層的に関わっている。

2. 4 鉱工業に集中しがちなクラスター概念

Porter らの地域経済の競争力の視点は、自治体合併で地方財政の厳しさがさらに顕在化した日本社会にとって非常に重要であり、地域経済政策の光明となりうる議論である。しかし、過去にも繰り返され続けてきた産業技術政策によって注力されてきた産業集積地が「クラスター」として持続できなかったことに対する視点も重要である。これまでの日本の産業クラスターの議論は、経済的効果や先端技術に関するものが多く、そこでは政府、自治体、大学等研究機関の役割など、従来の産業論では語られてこなかった多様なアクターの存在が特徴的である（山崎編 2002；伊丹他 2003；石倉他 2003；橘川他 2005；鎌倉 2005）。また農業クラスター、観光クラスターに関する議論もあるが、継続性ではなく、その形成メカニズムに着目したものが多い。伊丹は産業集積地の中小企業の柔軟性に着眼し起業しやすさに関心を注いでいる。またクラスター継続のメカニズムを分析しているが、クラスター内にある企業の継続、つまり老舗企業への関心は低い（伊丹 2003）。Porter も石倉もクラスターはハイテクに限らないとしてワイン生産地やりんご生産地にも着目しているが、やはり、その多くはハイテクに関心が集中している。ことに日本のクラスター論は、鉱工業系の産業に関心が集まりがちで、たとえば部品メーカーでの高度な分業とネットワークを想定したものが多い。まずは Porter の議論との比較の中で、これらの産業の事例研究は重要であるが、クラスターには他にも看過されている要素がある。Porter が示したダイヤモンド・モデルを始めとする「クラスターの要件」について、多くの議論がなされているが、要件の定義に過度に集中すると、そこでどのような現象が起こっているのかが欠落しがちである。クラスターの議論では経済学的、政策学的視点が非常に多いが、人と人との関係性、個人の属性や組織、地域の特性など社会学的な観点から見られたものは極めて少ない。

2. 5 クラスターの社会的・文化的背景の研究

そこでわれわれはクラスターの詳細な概念定義は専門家に任せ、一般的に言われてきた「ある特定分野」を中心とした（実際には酒造業以外の多様な業界との連関がある）多様なアクターの存在、地理的近接性などの要件に当てはま

るとして、伏見日本酒造業を中心とした関連業種、自治体、大学、地域との関係性の調査から始めた。われわれの研究の中で重要なキーワードは「継続性」、「連関」である。まず1つめに「継続性」は、従来のクラスター論で述べられてきたクラスターそのものの継続だけでなく、企業の継続、つまり老舗の存在にも着目している。これまでのクラスター論では、創業のしやすさが重要なキーファクターであったが、われわれのクラスターへの関心は、経済的な意味だけでなく、規範意識など、文化的な意味からの位置づけであることから、本研究では創業のしやすさより、老舗や新興企業の行動パターンとの関係性に関心をもっている。

2つめに「連関」は、(1)日本酒を中心とした関連産業との関わり、(2)大勢の蔵人の生活に必要な産業との関わり、(3)そして京都という一大文化資本圏との関わりに関心をもっている。これらは他の複合的クラスター（各産業を中心とした関連産業が集まりつつも、他の業界とつながっており、ひとつのアクターが複数のクラスターのアクターであるような状態）との関係から、その波及効果があると考えられ、「地域」を距離的近接性—フェーストゥフェースの部分に関心が集中しがちな—だけでなく、文化的な関わりからも分析を行う。

そしてこれらの要素を考えるには、社会構造、社会階層、社会移動との連関として、日本の産業構造の変化が日本酒業界にどのような影響を与え、またそれと連動して社会階層、社会移動にも変化が起こり、ひいてはそれが伏見の技術にも影響を及ぼすことになるという動的な連関構造を知る必要がある。これは固定的に保守されつつ継承されているとイメージされがちな伝統産業が、現代に至るまで動的に変化しつつ継続していることを指す。また伝統的な京都伏見酒造業は国内だけに留まらず、海外にも展開可能な製品として、新たな局面を迎えている。最後にこの事例を取り上げ、伝統と近代、ローカルとグローバルな連関を取り上げる。これらの関心から、まずは伏見の蔵元を網羅的に調査し、そこから関連産業との連関構造を分析し、継続性に関わる事象、伏見酒造業界の構成員に共有される規範意識と相互補完性などへと研究を展開する。

3. 伏見調査概要

われわれの調査は2004年秋に企画を始め、2005年2月に伏見酒造組合より調査の承認を受け、4月に正式にスタートした。まず、2005年6月～8月の期間に、伏見酒造組合の協力のもと、伏見の酒造業者22社（黄桜酒造株式会社、株式会社北川本家、株式会社京姫酒造、キンシ正宗株式会社、月桂冠株式会社、

齊藤酒造株式会社、三宝酒造株式会社、招徳酒造株式会社、宝ホールディングス株式会社、玉乃光酒造株式会社、鶴正酒造株式会社、株式会社豊澤本店、花清水株式会社、藤岡酒造株式会社、平和酒造合資会社、株式会社増田徳兵衛商店、松本酒造株式会社、都鶴酒造株式会社、御代鶴酒造株式会社、向島酒造株式会社、株式会社山本本家、伏見銘酒協同組合)を対象に、各蔵の歴史と現状、関連業者とのつながりの推移、地域社会とのつながりの推移などの項目に関する調査を行った。その時点で伏見酒造組合の組合員数は29社(伏見銘酒協同組合を含む)であった。本研究に協力いただいた酒造業者22社は当時の伏見において現在も実質的に酒造りを行っているほぼすべての酒造業者である。この「蔵ヒストリー」調査においては、基本的にそれぞれの蔵の代表者もしくはそれに準ずる人物を対象としたインタビューを行ったが、諸々の理由から、一部の蔵に関しては、社員(製造部門や広報部門の担当者)を対象としたインタビューを行った。さらに酒造業に関わるパートナーとして地元地域、神社、原料米提供農家、種麹業者、柿渋業者、樽業者、瓶業者、包装業者、流通業者、副産物加工業者へのインタビューを行った。2006年4月からは農家、流通業者、副産物加工業者への追加調査、発酵業用機械業者、伏見の地域資源活性のキーパーソンなどへのインタビューを行った。そして、それと並行して、伏見酒造業で働く人々の酒造業での就業意識を分析するために従業員へのアンケート調査を行った。インタビューは30余の機関、延べ100回を超える調査、アンケートは7割近い高回収率という協力を得た(この量的調査の結果は別稿に譲る)。

4. 伝統的産業クラスターの特性

4. 1 動的持続性に寄与する4つの特性

われわれが調査を行った伏見酒造業界は、5年以内にそのほとんどが消失するベンチャーを対象にしたクラスター研究ではなく、数百年の長きにわたり近接産業と関連し、動的に変容し続け、継続するクラスター(本稿では「伝統的産業クラスター」と呼ぶ)である。この対象を指す言葉として、単なる同業者の産業集積ではなく、ある産業を中核に様々な異業種が関連し、高度に集積して、時代とともに変化するダイナミックな状態にある地域という、集積より動的な状態を含む概念として「クラスター」を用いている。以下ではわれわれがとらえた伝統産業クラスターの「動的持続性 **dynamic sustainability**」という特性について述べる。

伏見日本酒クラスターには、300有余年の間継続している伝統的な蔵が存在す

る。「伝統」に対するイメージは「変わらぬ技」かもしれない。しかし、京都は積み重なる歴史の中で、常に変化し続けながら、継続してきたまちである。京都の中で今も息づいている伝統産業は同じ状態を維持しているだけでなく、すべてそれぞれの時代に合わせて変容してきたからこそ、現代にも残っており、継承されているのである。伏見酒造業も同様であり、酒造業を取り巻く社会的環境は創業当時から現代まで大きく変化し、人々の嗜好もまた変化し続けている。したがって消失せず存在し続けていることは、動的な変容をしてきた証でもある。クラスターを形成する関連産業も固定ではなく、変わり続けているのである。本研究では、現代のクラスター研究は政策を意識した10年、20年の短期的なスパンやベンチャーを想定した議論が多いが、アメリカとは異なる長期間の時間軸をもつ古都京都で育まれてきた継続する力、すなわち「持続力」について議論したい。このことは伝統産業や酒造業に限らず、たとえば京都の創業120余年の高度技術をもつ精密計測機器メーカーでも同様の企業理念が存在し、一気に売り抜くような商法ではなく、「継続するノウハウ」を大切にし、顧客からの信用を得ている（2005年インタビュー 役員A氏）。

この伏見日本酒クラスターはパラドックスの宝庫であり、地域的な「弱みが強み」であり、新しい技術が登場しても陳腐化しない伝統的製法が近代的製法と並存し、「伝統的な技でありながら再現が難しい」という人間と菌の勝負という日本酒像業の難しさがある。われわれは調査結果から、これらのパラドックスが、彼らを「流動性、変化に強い気質」として育み、継続するエネルギーをもつ地域となったと結論づけている。

以下では伏見日本酒クラスターが動的に継続して来た要因として、「社会的側面」（産業構造の変化と蔵人の供給、階層構造から見た蔵人の位置づけなど）、「地域的側面」（都市近郊の酒造業のメリットとデメリット、競争的環境下の杜氏集団、選択される原料米など）、「文化的側面」（伝統産業群との伏見酒造業との補完的な連関、老舗と新規参入の蔵人の気質、産業間のインターフェース機能、伏見酒造業へのフィードバック機能、棲み分けと補完性など）、「技術的側面」（並行複発酵の伝統製法と近代製法の並存、近代科学の技師と職人技の杜氏の共存、情報共有規範と均衡の妙、変化する関連産業など）について説明する。

4. 2 社会的側面

4. 2. 1 産業構造の変化と蔵人

かつて第一次産業従事者が多かった時代には、農閑期の出稼ぎ労働者が農村地域に多数存在し、伏見酒造業界と出稼ぎ労働者としての蔵人は、需要と供給の関係にあった。しかし、高度経済成長期以降、通年での雇用が保証される鉾

工業の求人増加から、若年層には半期農業、半期出稼ぎという移動をともなう身体的、精神的負担が大きい酒造業への従事者が減少し、杜氏、蔵人の高齢化が始まった。それは伏見酒造業の技術的継承の問題と直接的に関わる問題であり、蔵元に危機感をもたせ、機械化、社員化への契機となっていったのである。ただし、これは杜氏導入制度の廃止を意味するものではなく、緩やかな並存であり、杜氏の目利きを活かしつつ、機械化も進めていったのである。

4. 2. 2 階層構造と蔵人

蔵人は季節労働者であり、地元の農林水産業だけでは収入が乏しい地域の人々が多く、次年度の契約は大変重要であり、それには職人としての技術とチームとしてのパフォーマンスが重要であった。これに対して蔵元は杜氏に技術を委託する投資家のように、その杜氏が率いる蔵人集団に支払いを行い、製品として出来上がった酒を受け取り、その売り上げから収入を得る。日本酒は腐敗との戦いと言われてきたが、蔵元の多くは酒が腐敗することで1年分の投資をすべて失うリスクを背負っても生活が成り立つ資産をもっている。蔵元家族と蔵人集団とは雇用者、使用人として明確に分離された関係であり、相撲部屋のおかみさんと弟子のように、杜氏、蔵人集団の世話をするような関係ではない。

4. 3 地域的側面

4. 3. 1 都市近郊の酒造業のメリットとデメリット

伏見という地域は3つの歴史が重なった所である。奈良時代には都の皇族・貴族に好まれた景勝地として、安土桃山時代には伏見城の城下町として、江戸時代には大坂との交通の要所として、いつの世でも京都と関わりつつ、ある一定の距離を保ちながら栄えてきた歴史がある。いずれにしても人の往来が途絶えることがない地の利と交通の便のよさというインフラに恵まれた所である。そして都市部に隣接しているため、消費地が近いという有利な条件下にもある。

しかし、この都市部に隣接しているというメリットは、酒造業にはデメリットでもある。まず都市部には第一次産業以外の労働市場が多く存在し、地元で第一次産業従事者が少ないため、伏見には杜氏がない（現在は杜氏の高齢化もあり、社員への技術移転を行っている企業も少なくない）。さらに同じ理由から酒造好適米の供給も地元からはわずかししか得られないという、酒造りに重要な人材と原料がないという大きなハンディキャップになるのである。伏見地域は、酒造りにおいて都市部近郊ゆえの有利さと不利さを併せ持つ地域である。

4. 3. 2 競争的環境下の杜氏集団

伏見地域は常に外来の人材を確保しなければならないという不利な条件下にある。しかし、これには弱みが強みというパラドクスが潜在している。たとえば、杜氏は酒造りのすべての作業を蔵元から請け負うため、作業集団を引き連れて入浴するが、連れてきた蔵人の働きが悪い場合、杜氏自身も自分の酒造りの成果が落ちるため、翌年からその蔵人を連れてこない。さらに伏見での人材供給ではないため、惰性による雇用継続の必然性がなく、蔵元が杜氏の出した成果に満足しない場合、翌年には別の杜氏を選ぶことが可能であった。そのため杜氏を輩出する地域では、伏見からの需要がなくなることは、現金収入源を断たれることを意味するため、地元でも優秀な杜氏・蔵人が供給されるという好循環が成立した。地元人材供給型の酒造地域に対して、多様な地域から人材の供給を得ている伏見酒造業では、越後・南部・安芸など各地域の杜氏が次年度も雇用されるよう腕を競い合った。伏見酒造業は、競争的環境下で杜氏集団によりよい仕事をするを動機づける制度づくりに成功し、人材不足という弱みを強みに転じたのである。

4. 3. 3 選択される原料米

伏見酒造業の発展軌跡を辿る際、豊富な良質の地下水という条件は非常に重要である。しかし、水だけでは酒を造ることはできない。杜氏がないこの伏見には地元米も少なく、地域外の農協から仕入れるという不利な条件下にある（農協は地元の酒造業者を優遇し、県外はやや不利になる）。しかし、これは転じて、固定の農協から購入しなくてもよいということも意味している。地元米が少ないという弱さは、不作の年には廉価で提供する地域の農協を選択することが可能となり、コストを押さえるために広い選択可能性をもつ優位性として働いた（そのために、伏見の杜氏集団・酒造技術者たちは、米の特性が毎年固定とは限らず、発酵の度合いの見極めに苦労し、さらに技術力が磨かれていった）。

労働力と原料という外せない要素をさまざまな地域から受け入れるということは、受け入れ側においては比較と選択の余地があるということの意味し、逆に、送り出し側においては競争を余儀なくされるということの意味する。このように弱みを強みに転換することで、全国で最も多い酒造量である灘に比べて場所・人・原料という資源がはるかに少ない条件であるにもかかわらず、伏見は現在でも全国で2番目に多い酒造量を誇っているのである。

4. 4 文化的側面

4. 4. 1 伝統産業群との補完的な連関

京都との関係性から伏見地域を概観すると、伏見酒造業は京都とはある一定の距離を保ちつつも、京都という寺社仏閣などの伝統行事に欠かせない「聖なる酒」の供給源として、また和食の中心拠点である京都における「京料理の適合酒類」の供給源として、それらを資源とした観光業との連関においても、重要な役割を果たしている。そして、これらの産業との相互補完的な関係が形成されている（たとえば神社への献酒や料亭での利用など）。さらに京都には伝統産業群（たとえば、西陣織、友禅染、清水焼など。他にも文化的産業として華道、茶道、香道など）が多く存在し、相互にそれぞれの産業が密接に連関している。京都の伝統産業群はそれぞれの行事や営みの中で伏見酒と関わり、その消費を助けている。

4. 4. 2 老舗と新規参入の蔵元

伏見地域は京都の南部に位置し、旧市街地の外にある。かつて旧市街にあった蔵元の酒は「御所納め」のお酒として格が高く、伏見の酒は「場違い酒」と呼ばれ、洛外の庶民の酒という位置づけであった。しかし、京都の旧市街地の数百あった酒蔵は現在1軒になり³⁾、京都周辺で酒蔵が集積しているのは伏見だけになった。伏見地域は土地柄、インフラ条件が整い、多くの人々が往来し、流動性の高い所であったため、外来者に開放的な社会構造であったことが伺える。たとえば300年以上の歴史を誇る老舗蔵、洛中で営まれていた蔵、昭和中期になってから伏見に参入した創業約70年の新しい蔵など、蔵の歴史は多様である。蔵の創業者も明治以降に他地域（洛中エリアのほか、大阪、和歌山、丹波など）から伏見へ移転してきた業者が多い。また企業規模も大企業の蔵から家族従業者のみの蔵まであり、大小さまざまである。蔵元の特性に着目すると、規模の大小、伝統、蔵元の出身地域など、多様性をもった人々によって構成されており、一枚岩ではない特性と新たに参入する者を受入れるオープンマインドな気質をもった地域であることがわかる。

4. 4. 3 インターフェース機能

伏見の酒造業者は、さまざまな関連業者（原料米生産者、種麴業者、柿渋など補助材料専門業者、機械業者、容器業者、包装業者、輸送業者、輸送用ケース製造業者、卸売業者、小売業者、副産物の卸売業者・加工業者、広告業者、印刷業者など）と有機的に連関しながらひとつの産業クラスターを形づくってきた。これらの業者の中には、酒造業者と関連業者間の、あるいは酒造業者間

のインターフェース的な役割を果たす者もある。日本酒造業界では、このインターフェースを通して技術情報やビジネス情報だけでなく、就職・転職情報、さらには縁談情報までを含むさまざまな情報が行き交ってきた。この一見私的に見える交流の中でも、醸造技術、酒造りに関わる者の経営理念やものづくりエートスが長期にわたって伝承されてきたのである。

4. 4. 4 フィードバック機能

また日本酒は杜氏による発酵具合の見極めが重要であるが、時代とともに変化する顧客の嗜好が杜氏の造る酒といつとも一致するとは限らない。伏見酒造業を支える流通業、小売店、飲食店など日本酒を扱う関連業者は、顧客の要望をいち早く蔵元に伝えて、対応を要求する。市場からのフィードバックは、伏見酒造業の発展を願う関連産業の若手の継承者たちからである。若き経営者や次の経営者となる世代が、伏見酒造業を盛り立てようと有機米作り、伏見の酒の普及に努力しており、伏見酒造業の活性化を支援するとともに厳しいモニターでもある。この世代が清水焼などの伝統産業群との交流を生みだし、日本酒の新たな可能性を広げている。

4. 4. 5 棲み分けと補完性

伏見酒造業ではそれぞれの蔵が相互扶助の関係で大企業と中小企業が棲み分けて共存している。たとえばある酒蔵は業務用アルコールを販売していることもあり、日常の酒は他社の領域として、自社では祝用の酒のみを製造し、他社との競合を避けた棲み分けを行っている。またある中小の蔵は機械や原材料を共有して効率よく造る施設の利用を複数蔵で行っており、また大手企業のために自社の桶を提供する蔵や、反対に小さい蔵のために代理で造る蔵もある。この大小の企業間の棲み分けや補完関係は酒造業に限らない。たとえば先述の計測機器メーカーでは、下請け企業の営業範囲である京都市周辺の市場を荒らさないよう他府県の顧客と契約を結び、自社の部品を下請けする中小企業への影響を少なくする配慮をしている（下請けの部品メーカーはこの計測機器メーカーの専属ではない）。京都の企業の関係でしばしば見られるのが、中小企業は大企業のため、大企業は中小企業のために役立ち、相互に補完性が成立する関係が見られる。

伏見地域の酒造業者には、大企業、中小企業、家族従業者のみの企業とさまざまな規模の蔵がある。しかし伏見地域では大企業が中小企業を駆逐するのではなく、近代的な技術による製造方法で生産する蔵もあれば、伝統的の製法で造り続けている蔵もあり、共存が成り立つのである。

4. 5 技術的側面

4. 5. 1 並行複発酵の伝統製法と近代製法の並存

日本酒は古くから神事を始めとする伝統行事や庶民の日々の生活に浸透した酒類である。その製法は「並行複発酵」という発酵と糖化が同時に行われる世界に類い希なる高度な技術を受け継いでいる。そして発酵と糖化のタイミングを見極めるのが、伝統的製法の場合、杜氏による目利きであり、近代的製法の場合、センサー技術ということになる。多様な酒類が飲まれるようになった今日、人々は必ずしも日本酒だけを消費するわけではないが、日本酒造業者は本格的な味を追求しつつ、現代人の嗜好に合わせた酒造りを行っている。日本酒の製法は、昔ながらの製法と近代的な高度技術を駆使した製法が並存しており、これまでの「技術は進化し、昔の技術は陳腐化する」という常識を越えたものとなっている。この伝統技術と先端技術の並存は、これまでの技術観を覆すものといえるだろう。

4. 5. 2 近代科学の技師と職人技の杜氏の共存

酒造業は、古い歴史を紐解くと、税の対象として時の政府が常に管理下に置いてきた経緯がある。かつて酒税が国税の半分を占めたこともあり、大蔵省（現財務省）の技官が全国の蔵元を視察に回っていた。酒造業の発展は税収増加につながることから、明治期の大学出身者が希少であった時代から大蔵省の技官の紹介により東京帝国大学（現 東京大学）を始めとする帝国大学で醸造学を学んだ技師が酒造業に就職していた。酒造業は高学歴な醸造学を修めた技師と出稼ぎ労働者の杜氏集団の職人技による共同作業という極めて希有な職場環境で酒造りを行ってきた歴史をもつ。別稿に譲るが、現場でたたきあげられた職人と近代科学の融合による酒造りのエピソードは極めて興味深い経緯がある。現代でも伏見酒造業では、伝統的製法と近代的製法で酒造りを行う蔵が、同じ日本酒という成果物を提供し続けている。

4. 5. 3 情報共有規範と均衡の妙

日本酒造業界には不思議な共有規範がある。それは人・原料・水の次に重要と言われる「酵母」の交換や酒造りのプロセスで困難に陥った場合の救済策などを共有する風土である。本来、酵母や困難を乗り越えるコツは職人の重要な技であり、自己の技能優位性を保つためには秘匿的に扱いたい情報である。しかしながら、伏見酒造業では（東北の事例など、他の酒造地域にも見られる）、信頼関係が形成された者同士の間では、酵母や酒造りに関する重要な情報が交換されている。特に酵母はある地域で流行ると翌年には全国に広まる（先のイン

ターフェース機能による)と言われるくらい発酵を左右する重要なものとして要望が強いが、特に囲い込みなどの行為は行われたい不思議な傾向がある。これらの行為については、酒造りに関わる人々は「囲い込むなんてケチなことではない」、「譲ってあげても同じものを造るのは難しいので真似をしにくい」などの理由からオープンマインドで共有すると語る。これは発酵業に共通するテーマであるかもしれないが、酒造りは原料米が育成された自然環境、造りの時期の気候、使用されている米、使用酵母などの組み合わせパターンにより、菌の発酵の度合いが毎年異なり、同じものを模倣しようとしても難しいという均衡の妙がある。ある酒造技術者は「ある意味、自分でも昨年と同じものを再現するのは難しい」と語っている(2006年度質問紙調査用プレ調査から)。

4. 5. 4 変化する関連産業

関連産業は常に固定ではなく、技術革新によって必要性が変化する。たとえば、木桶は雑菌が洗浄しきれないためにステンレスになり、木桶業者から機械業者へと連関が移行する。雑菌処理技術が高度化し、かつて殺菌のために用いられた灰や柿渋は現在では使われなくなったため、これらの業者から機械業者へと連関が移行する(現在、柿渋業者は建材など異なる産業との連関へと展開している)。かつて腐敗との戦いのために進展していった技術は、また現在の流行と細菌管理技術の発達、バイオ技術の発達により、新たな局面を迎えている。そこでは「伝統」「手作り感」などの人気の高まりから、雑菌と戦っていた頃の手法、用具を懐かしむという、技術を超えた文化的嗜好品としての展開も要求されており、現在では、手作り感演出のために木桶も再び人気を集めている。このように技術革新によって日本酒を取り巻く産業との連関は変化し、日本酒クラスターは連関する産業が入れ替わりながら継続しているのである。

5. 伝統的産業クラスターの「動的持続性」

灘という水・杜氏・米に恵まれた巨人が近隣にあり、全国の地元供給型の酒造地域も多数ある中、水以外はすべて外来という弱みが強みであるというパラドキシカルな地域特性をもつ伏見酒造業は、杜氏を競争的環境下におき、最も優秀な杜氏集団を獲得することを制度化し、低コストで良質の米を選択する自由度をもつことで、小さな巨人としてクラスターを持続している。日本酒造業のもつ伝統的製法と近代的製法の並存という特性は、近代的製法の大企業と伝統的製法の中小企業の共存、高学歴な技師と職人技の杜氏の融合の成立を意味

している。これは「技術は進化し、昔の技術は陳腐化する」という、これまでの技術観を覆すものである。

また伏見の酒造業者は、総じて伏見全体の協調という点に重きを置かず、大きな外圧がないかぎり結束することがない。そのため、この構造は高開放性という特徴をもち、外来者を受入れやすいオープンマインドな気質がある。そして企業を超えた情報交換（技術・ビジネスに関わるものからパーソナルなものまで）が、技術者や出入業者のインフォーマルな関係を通して行われるという現象を生み出し、インターフェースとして機能している。

常に動的な状態の中で均衡をとりながら、安定した製品を生み出そうとする造り手の技術からは、「環境や条件が変わっても適応する」という精神が受け継がれていることが伺える。また酒造業をとりまく産業との連関は酒造業への重要な刺激となって、新しい取り組みへの契機となっている。われわれは調査で見出した伏見日本酒クラスターの特徴から、この精神と関連業者との有機的連関こそが、動的持続性の起動力であり、伝統的産業クラスターを継続させていると結論づけている。

6. 今後の展望

本稿では本研究の方向性を示す総論的展開をしてきたが、今後、これまで行った各調査の内容を詳細に記述する各論についての原稿を執筆する予定である。まず、1つ目に質的調査によって得られた各アクター間の関係性について、具体的事例を示す。2つ目に技術的变化と連関の関係について構造的要因から分析を行う。3つ目に伏見酒造業を支える人々の規範意識、就業観を計量データから分析する。最後に、質的データと計量データから導かれた分析結果を元に、その連関の意味、社会的、文化的背景について議論を行う。

また本研究において予備的調査を行った日本酒の海外展開（特にアメリカでの現地生産・販売）というトピックは、さらなる調査展開の可能性を生み出した。この事例は、伏見の地元消費のみに留まらず、東京、全国への展開という特性の展開例として位置づけられる。現在、日本酒業界が抱える国内消費量の減少という難題に果敢に取り組み、現代でも進化し続ける日本酒造業界の現場を知る機会となる。そのため2007年度は、アメリカ・カリフォルニアの日本酒メーカーを取り巻く産業・社会的連関に関するフィールド調査を実施する予定である。

注：

- 1) (独) 経済産業研究所では、地域クラスターセミナーの事務局をしており、以下の記述がなされている。「RIETI は、文部科学省科学技術政策研究所 (NISTEP) 及び研究・技術計画学会と共催で、また、在京各国大使館の科学技術ディプロマツサークルの協力を得て、地域政策や産学官連携に関連した実務家及び研究者をメンバーとして、1~2 か月に 1 度の頻度で「地域クラスターセミナー」を開催しています。この「地域クラスターセミナー」は、研究・技術計画学会地域科学技術政策分科会の東京地区会合としても位置づけられています。」
- 2) 第 1 期は平成 13 年度~平成 17 年度、第 2 期は平成 18 年度~12 年度。
- 3) 京都市の北の端にもう 1 軒酒蔵があるが、旧市街地からは伏見以上に遠い場所にある。

インタビュー：

2005 年、計測機器メーカー役員 A 氏へのインタビュー

2005 年、伏見酒造業組合および協力蔵へのインタビュー

黄桜酒造株式会社、株式会社北川本家、株式会社京姫酒造、キンシ正宗株式会社、月桂冠株式会社、齊藤酒造株式会社、三宝酒造株式会社、招徳酒造株式会社、宝ホールディングス株式会社、玉乃光酒造株式会社、鶴正酒造株式会社、株式会社豊澤本店、花清水株式会社、藤岡酒造株式会社、平和酒造合資会社、株式会社増田徳兵衛商店、松本酒造株式会社、都鶴酒造株式会社、御代鶴酒造株式会社、向島酒造株式会社、株式会社山本本家、伏見銘酒協同組合

2005 年、関連業者へのインタビュー

伏見地元地域商店街、御香宮神社、北野天満宮、種麴業者、柿渋業者、伏見向島エリアの酒米製造農家、樽業者、瓶業者、包装業者、流通業者、副産物加工業者

2006 年、関連業者へのインタビュー

農家、発酵業用機械業者、流通業者、副産物加工業者、伏見の地域資源活性のキーパーソン

参考文献：

伏見酒造組合一二五年史編纂委員会編，2001，『伏見酒造組合一二五年史』伏見酒造組合。

伏見区のホームページ

(<http://www.city.kyoto.jp/fushimi/>，2007.01.25)。

藤岡酒造株式会社のホームページ

(<http://www.sookuu.net/>，2007.2.12)。

月桂冠三百六十年史編纂委員会，1999，『月桂冠三百六十年史』月桂冠株式会社。

月桂冠株式会社のホームページ

(<http://www.gekkeikan.co.jp/>，2007.2.12)。

原山優子編，2003，『産学連携』東洋経済新報社。

伊丹敬之，松島 茂，橘川武郎編，2003，『産業集積の本質』有斐閣。

純粋日本酒協会のホームページ

(<http://www.junmaishu.com/top.html/>，2007.2.12)。

株式会社伏見夢工房のホームページ

(<http://www.kyoto-fushimi.com/>，2007.01.25)。

株式会社北川本家のホームページ

(<http://www.tomio-sake.co.jp/>，2007.01.25)。

株式会社豊澤本店のホームページ

(<http://homepage2.nifty.com/housyuku/>，2007.2.12)。

株式会社増田徳兵衛商店のホームページ

(<http://www.tsukinokatsura.co.jp/>，2007.2.12)。

株式会社山本本家のホームページ

(<http://www.sakejapan.com/sake/shinsei/>，2007.2.12)。

鎌倉健，2005，『産業集積の地域経済論－中小企業ネットワークと都市再生－』勁草書房。

キンシ正宗株式会社のホームページ

(<http://www.kinshimasamune.com/company.html>，2007.2.12)。

橘川武郎・連合総合生活開発研究所編，2005，『地域からの経済再生－産業集積・イノベーション・雇用創出－』有斐閣。

黄桜酒造株式会社のホームページ

(<http://www.kizakura.co.jp/>，2007.2.12)。

経済産業省 産業クラスター政策のホームページ

(http://www.meti.go.jp/policy/local_economy/downloadfiles/Business_environment_prom_div/CLUSTER.html，2007/02/12)。

Lee Chong-Moon, Miller William F., Hancock Marguerite Gong, and Rowen Henry S. Ed, 2000, *The Silicon Valley Edge: a Habitat for Innovation and Entrepreneurship*, Stanford University Press. (=2001, 中川勝弘監訳, 『シリコンバレー：なぜ変わり続けるのか 上』・『シリコンバレー：なぜ変わり続けるのか 下』 日本経済新聞社.)

松本酒造株式会社のホームページ

(<http://www.momonoshizuku.com/>, 2007.2.12).

御代鶴酒造株式会社のホームページ

(<http://www.miyozuru.com/>, 2007.2.12).

文部科学省 科学技術政策研究所のホームページ

(<http://www.nistep.go.jp/index-j.html>, 2007/2/12)

向島酒造株式会社のホームページ

(<http://www.geisya.or.jp/~furisode/>, 2007.2.12).

Porter, Michael E., 1998, *On Competition*, Harvard Business School Press.

(=2005, 竹内弘高訳, 『競争戦略論 I』・『競争戦略論 II』 ダイヤモンド社.)

齊藤酒造株式会社のホームページ

(<http://www.eikun.com/>, 2007.2.12).

招徳酒造株式会社のホームページ

(<http://www.shoutoku.co.jp/>, 2007.2.12).

宝ホールディングス株式会社のホームページ

(<http://www.takara.co.jp/>, 2007.2.12).

玉乃光酒造株式会社のホームページ

(<http://www.tamanohikari.co.jp/>, 2007.2.12).

植田浩史編, 2004, 『「縮小」時代の産業集積』 創風社.

山崎朗編, 2002, 『クラスター戦略』 有斐閣.

安岡重明編, 1998, 『京都企業家の伝統と革新』 同文館出版.